

# 再考しよう——誰にとつての安全？ 誰にとつての安心？——

入江礼子

(大学教員)

ある日、TH(五歳男児)は、祖母がお月見団子を持ってきてくれたお札に手紙を書いた。そして、母親に祖母の住所を書いてもらった封筒にその手紙を入れて、入念に封をした。

TH「ぼく、一人でポストに行く」

母「車を通るから、危ないから一緒に行こう？」

TH「ううん。一人で行く！」

その日は日曜日。母親は父親と相談して、一人で行かせる決心をした。

母「気をつけて行くのよ。道路を渡るときは保育園のときと同じように、右、左って見るのよ！」

TH「わかった。ぜったいに<sup>シ</sup>ついて来ないでよ！」と念押しして、彼は靴を履いた。

TH「行ってきまーす」

母「気をつけてねー」。そして、母親はTHに気付かれないように、そーつと遠くから見守った。

THは一生懸命きちんと歩道を歩き、右見て、左見て、道路を渡ってポストに投函。そして投函するや否や、右見て、左見て、を繰り返し、再び道路を渡るや、猛ダツシユで帰路に就いた。母親は渡ったのを見届け、THに見つからないようにすぐさま家に戻って、THを迎えた。

入江礼子(いりえれいこ)  
共立女子大学家政学部児童学科教授。子どもは何を考へ、何を感しながら生きているのだろう。一生懸命生きていることだけは確かな彼らのそばにいて、その謎を少しでもひもどくのが今の夢です。

TH 「ただいま！」

母 「おかえり!!」

TH 「ぼく、一人でポストに行ってお手紙出した！」

母 「ほんと！ お兄さんになったのねえ」

母親はつぶやいた。「私と一緒に歩いているときは、『右見て、左見て』って言っても、言われたままに首を動かすだけだったけれど、一人の今日は違った。真剣に右も左もすっかり見ていた。私が手放すことで、彼なりの『自分の責任』というのを体感したのかなあ」と。

子どもたちが一度は経験する「初めてのお使い」。筒井頼子作・林明子絵の『はじめてのおつかい』（福音館書店）をまつまでもなく、子どもにとつての初めてのお使いは新しい自分への脱皮のときでもある。その脱皮のときには、親の側の一歩下がった見守りと、自分の手を放す決意が隠れている。もし、子どもが事故に遭ったら、それは親の責任だ。その責任をとる覚悟のときでもあるのだ。

ところで、目をいったん、保育所・幼稚園・認定こども園などの保育施設（以後、「園」と表記）に移してみよう。今、これらの園では「安全・安心」という言葉が氾濫している。子どもを預ける保護者側も、この「安全・安心」という言葉を園選びのキーワードにしている観もある。預けるのだから、これが必要最小限の条件と思う保護者も多い。また、それだけでいいという切羽詰まった保護者もいるのが現状だ。一方、それらの意識を受けて、と言っては少々オーバーかもしれないが、園側も、まずこの「安全・安心」を表に打ち出す。「お預かりした姿のまま、お返しいたします」という極端な言葉も聞かれるほどに。この意味は、「朝、預か

った子どもの状態のまま、傷一つなく降園時に保護者に返す」ということだ。これは保護者にとつては至極当然のことと思われるかもしれない。大切な子どもを、元あった状態のまま返してもらわなくては、子どもを預けている間中、心配になってしまうからだ。その保護者の要望を文字通り受け入れている例が、保育室等にカメラを付けて、保護者が職場にいても、いつでも子どもの様子を見られるようにしている場合などだ。こうして「安全・安心」という言葉は増殖を繰り返し、わが国の園全体を覆っている観すらある。

でも、ここでちょっと立ち止まって考えてみたい。「安全・安心」は誰のものかということ。今これは、園に子どもを預ける保護者と、その意をくんだ園のものになっていないのではないか。そもそも、100%安全ということは、自然界に生きる人間にとつてあり得ないことだ。生きるということ自体が死に向かつてのリスクをはらんでおり、そのリスクを0にするというのは人間業ではできない。しかし私たちは時としてそれを忘れる。そして、100%安全論に走る。だが、100%安全論は子どもから成長を奪う。なぜなら、成長を遂げるときには必ずやリスクを伴うからだ。そのリスクを保護者や園もどのように負えるか。これを負う双方の覚悟の程度によつて、それぞれの園の「安全・安心」の落としどころが決まってくると言えるだろう。

この100%安全論がまかり通り始めている中でも、前述の園とは正反対の園もある。この園は、園舎を挟んで表と裏に園庭があり、子どもたちはまるで回遊魚のように、この表と裏の園庭を行き来する。その表と裏を結ぶ道、園の垣根と園舎の間の狭い道なのだが、実はこの道、どこほこがあり、石ころが転がっている。雑草も生えている。入園前の子どもたちは、ほとんどいつも大人の目の届く所で過ごす。転ばぬ先の杖ならぬ親のフォローが入るため、転ぶだけ

の経験もない。この経験不足の故、入園当初は、この狭い道で転んでけがをする子どもが後を絶たない。しかし、一学期もたてば、けが人は激減。一年たてば、ほぼなくなる。

この、けが人が続出するあたりの時期が、園にとつては正念場。もちろん、入園前や入園直後の説明会で、子どもの成長には「うまくいかない経験」や「リスクを伴う経験」が必要などと、時にはそれはけがを通して学ぶこともあることなどを繰り返し説明する。保育参観を定期的に行い、大人も一緒に遊びながら子どもの体験していることを感じてもらう努力をする。こういう努力の積み重ねがあつて、徐々に、保護者と保育者の、子どもの成長にとって必要な経験に対するその年ごとの「落としどころ」が決まる。

一昔前の保育現場であつたなら、「これは園の方針」と言つて提示すれば済む場合もあつた。しかし時代は移り、今は「園の方針」と「保護者の思い・考え」をすり合わせる場を複数重ねて、その年ごとの「落としどころ」を確認し合う。決めてもまた新たな事が起こるのが保育の現場。そこですぐに話し合いが行えるようなシステムになつていゝことが大事なのだと思う。先に述べた、預かつたままの状態で子どもを保護者に返す園では、おそらくこのような、あの意味時間をかけて園と保護者の関係を築くシステムは持つていないのではないのか。

子育ても保育も、本当に手間と時間がかかる。今の忙しい時代に、その手間と時間がかからない現実。それをすべて背負つて、親にとって「安全・安心」な園が増えるのも当然の成り行きではある。しかし、そこには子どもにとっての「安全・安心」がない。子どもにとっての「安全・安心」とは、保護者と保育者が確かな信頼関係を築く中、「安全とは言い切れないところに、不安を乗り越えて果敢に挑戦していく」場と時間が保障されることではないのだろうか。